

Title	夏目漱石『野分』論：自分の世界に閉ざされている青年たち
Author(s)	ウィリヤエナワット, ピヤヌット
Citation	阪大近代文学研究. 11 P.1-P.17
Issue Date	2013-03
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/68320">https://doi.org/10.18910/68320</a>
DOI	10.18910/68320
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 夏目漱石『野分』論

——自分の世界に閉ざされている青年たち——

ウイリヤエナワット・ピヤヌット

### 一、先行研究と問題の所在

『野分』は漱石が職業作家として朝日新聞に転ずる直前に執筆され<sup>(1)</sup>、明治四十年一月に「ホトトギス」に連載された。作品の初めでは、越後・九州・中国の三か所で中学校教師として働いていた白井道也が、実業家を批判し、華族と問題を起こし、同僚や生徒に追われて東京へ戻ってくる。従来、「白井道也は文学者である」という冒頭及び、「現代の青年に告ぐ」などという道也の演説に注目されてきたため、作品の主人公は道也である<sup>(2)</sup>と読まれてきた。

本作品の端緒について、漱石の明治三十九年の書簡と断片がよく言及されている。漱石は虚子に<sup>(3)</sup>「近々『現代青年に告ぐ』と云ふ文章をかくか又は其主意を小説にしたい」、「青年を奮発させる事をかくのだから」（傍線は筆者による。以下同じ）と手紙<sup>(4)</sup>を書いている。この漱石の発言から、石崎等氏<sup>(5)</sup>は作者の青年に対する関心を指摘している。ま

た、作品のモチーフについて、「苦悩する青年への激励・鼓舞ということが『現代の青年に告ぐ』という姿勢で書かれたこの作品の、主要なモチーフの一つである」という見解<sup>(6)</sup>があり、桶谷秀昭氏<sup>(7)</sup>が『野分』は、「思想家としての漱石の社会意識と文明批評の骨格が、はじめて明瞭に打ち出されたという意味で、重要な作品である」と指摘しているように、作品の解釈はなかなか作家自身から離れることができていない。さらに、明治三十九年の断片は『野分』の内容、とりわけ、道也の演説あるいは思想と重なる<sup>(8)</sup>箇所があるため、『野分』は「社会・文明に対する意識や批評の色濃く出された」<sup>(9)</sup>作品でもあり、『野分』が、青年に的を絞った露骨な教訓小説・啓蒙小説として構想され形象されねばならなかった所以である。」という秋山公男氏<sup>(10)</sup>の指摘など、以上の論文から見られるように道也は漱石の投影、分身である<sup>(11)</sup>と結論付ける先行論文が多くなるわけである。また、小泉浩一郎氏<sup>(12)</sup>は『野分』の構成の中軸をなすものは「

道也であることを述べ、道也の存在の重要性を指摘しつつ、彼と高柳の關係性を追求している。上述したように、道也の存在及び彼の論文と演説を作品の中心に置き、作品には作者による青年への「激励」が込められていると読まれてきた。

だが、「然し今迄僕の文章を見てほめてくれたものは一人もない」という道也の発言からも分かる通り、彼は自分の考えていることが世間から認められていないことを自認している。さらに、道也が「現代の青年に告ぐ」という演説をした後、作品の最後で彼は返済期限が切れた借金を厳しく取り立てられる。この場面から見られるように、道也の困難な経済状況を尊敬する高柳を惨めな境遇から救い出す手立てとはならない。道也が重視した発言や書物などは、最後に無駄なものとして終わってしまうという作品の結末から、本作品が教訓的であると見る見解や、青年に対する激励と見なされてきた読みに検討の余地が出てくる。

道也に重点を置くこと以外、高柳という登場人物に注目が集まり始まるのは昭和四十年代後半に入ってからである<sup>13)</sup>。

玉井敬之氏<sup>14)</sup>は、高柳は森田草平の投影であると述べ、漱石と草平が本作品の起点であると指摘している<sup>15)</sup>。そして、西垣勤氏<sup>16)</sup>は「この小説は高柳を中心にして」と述べ、

「このパターンは、『野分』にはじまり、『三四郎』の広田先生と三四郎、『こゝろ』の先生と私という世代論的対比の系

列となるのである。」と高柳と道也の關係に着目している。

以上の論文から見られるように『野分』研究においては、当初道也に重点を置かれたものの、徐々に高柳及び、高柳と道也との關係が重視されてきた。だが、虚子宛ての漱石の書簡から見られるように、漱石の青年に対する関心は明らかである。ならば、本作品における高柳と中野の關係は見逃せない。中野の存在について、内田道雄氏<sup>17)</sup>は「その中野の登場が二・三・四・七・九、と大体一章置きであることも作品を色彩あるものとするための作者の用意と見られるであろう」と指摘している。さらに、佐藤泰正氏<sup>18)</sup>は中野の存在を

「『低徊派』」「余裕派」「審美派」と見立て、「高柳、さらには道也とのコントラストとして描かれている」と述べている。これは内田道雄氏の見解にも見られるように、中野が出て来る第二・三・四・七・九章に注目されてきたため、彼は作品全体において単に作品を彩るものとして存在し、悲観的な高柳と対置される楽観的な人物としてのみ読まれてきた。しかし、彼は第十二章にも登場し、高柳を経済的に補助する場面もあるため、中野の存在は「審美派」や「諷刺の対象」としてのみの位置づけでは不十分だろう。

さらに、作品の「第四章」、「第七章」、「第九章」では、道也と高柳の惨めな境遇は多く描かれていないように見られるが、作品全体の各章において、以下のような「金銭」に関する描写が確認できる<sup>19)</sup>。つまり、作品の全体にわたって、

実業家乃至金銭に対する道也の批判を始め、家計についての道也夫婦間の会話、「第九章」に見られるように、中野の結婚式に参加する客たちの会話の描写、借金の取り立てなどという「金銭」にかかわる場面が描かれる。よって、本作品においては「金銭」という話題も重要になってくる。また、「実業家」は作品全体において道也と高柳の徹底的な批判の対象になっていることから、「富裕な名門に生れ」た中野と道也・高柳との関係を再検討する必要がある。本論では、まず、道也と高柳を中心に論じられてきた従来の先行研究とは異なり、中野と高柳の關係に重点を置きながら考察する。そして、作品において描写されている「煩悶」する高柳の姿に注目し、拘泥している高柳と拘泥していない中野の姿について考える。最後に、中野、高柳、道也に共通している「窓の外」を眺める行為について考察し、本作品の新たな読みを試みたい。

## 二、中野と高柳との關係

中野の存在について、佐藤氏の論文を踏まえた酒井英行氏<sup>(20)</sup>は「中野は、終始「男」としか呼称しか与えられていない。中野は、「青年」「男」としか呼称できない存在として創出されているのであって、中野サイドは、明らかに諷刺の対象としてしか描かれていない。(略)彼等はいわば点景人物しかない。(原文のまま)」と指摘しているように、中野の

存在はあまり重視されていない。しかし、作品の第七章に見られるように、中野と婚約者を中心に描写されることもあるため、中野は単なる「点景人物」ではないだろう。中野は初めて作品の第二章に登場し、公園で高柳に会い、「あの孟宗藪を回って噴水の方へ行く」女の人を「見給へ」と促す。中野はその女の「着物の色」に興味を持ち、「竹藪の傍へ持つて行くと非常にあざやかに見える。あれは、かう云ふ透明な秋の日に照らして見ないと引き立たないんだ」と着物の色彩を批評する。物事の美あるいは色を鑑賞し、それを楽しめる中野の姿について、内田道雄氏<sup>(21)</sup>は「只美的事許リヲ好ム人」の役割を振られていると判断できると指摘している。また、中野と「同じ年の此の夏に同じく学校を卒業」した高柳の「口数をきかぬ、人交りをせぬ、厭世家の皮肉屋と云はれた」閉鎖的な姿とは対照的に、中野の方は「鷹揚な、円満な、趣味に富んだ秀才」で社交的な性格が強調されている。言うまでもないことだが、同じ青年でありながら、性格を始め、家庭、社会的位置などというあらゆる側面で相違し、中野の存在が高柳と対照的に設定されているのである。また、「同じ文科」から卒業したものの、自分の書きたいものについて、中野は「空想的で神秘的で、夫で遠い昔しが何だかなつかしい様な気持のするものが書きたい」と述べるが、作品の最後まで彼の作品は具体的に描かれていない。その反面、筆耕や翻訳の仕事をしながら有名になり、「立派な作物」を

出すという願望を持つ高柳の姿勢は作品の最後まで一貫しており、彼が文学士として登場しているのは明らかである。要するに、「文学士」の理想をあまり語らない中野は、「空想的で神秘的」なものを書きたいと言うものの、結局彼の書いたものは描写されず、高柳ほどえらい文学士になるという願望も強調されていない。このことから、中野は文学士として登場しているとは言い難い。中野の存在の意味を明らかにするため、ここで彼と高柳が出会う各場面を考察したい。

中野が高柳と出会う場面は、第二、四、九、十二章が挙げられる。まず、第二章で、高柳は「丁度三度日比谷を巡回」しているところで、偶然中野と会う。中野は高柳を「『ハ、遠慮か。まあ来給へ』と「午飯に」誘い、高柳を「公園の真中の西洋料理屋へ引つ張り込んで、眺望のいゝ二階へ陣」取る。また、第四章においては、中野は再び偶然「動物園の前で」高柳と会う。高柳の寂しそうな様子を見て、中野は「『今日はそこに慈善音楽会があるんで、切符を二枚買はされたんだが、外に誰も行き手がないから、丁度いゝ。君行き給へ』」と「ここでも、高柳を誘う。二人が会う場面では、中野がいつも高柳をどこかに誘うという構図が繰り返されている。さらに、中野の結婚式について描かれる第九章では、中野が直接高柳を誘う場面は書かれていないが、『来るよ、わざ／＼行つて頼んだんだから、いやでも来ると約束すると来ずにゐられない男だから屹度くるよ』という中野と細君

とのやり取りから、中野が高柳を誘ったことがうかがえる。中野は「一人の集まる所やなにかを嫌つて許り居るから、一人坊つちになつて仕舞う」という高柳の性格を理解し、高柳の孤独感を和らげるため、いろいろな所に誘つていけると言える。だが、音楽会の場面では、「高柳君ははつと気がついた。矢張り異種類の動物のなかに一人坊つち」（四）という箇所や、あるいは中野の結婚式の際、「馬車の客、車の客の間に、只一人高柳君は踰躓して敵地に乗り込んで来る」、「富と勢と得意と満足の跋扈する所は東西球を極めて高柳君には敵地である」という箇所からわかるように、高柳の孤独感は一層増してしまふ。高柳はなぜこのような気持ちになるのかを明らかにするため、中野が誘う場所及びその場の環境を考えてみたい。

第二章で、中野は高柳を西洋料理屋に引つ張り込み、彼らは「大きな破れる様な声を出して笑始めた」二人の男を見た。高柳は「一種異様な厭な眼つき」や「厭な顔」をし、「商人」であるその二人の男を見、嫌悪を示す。また、中野に誘われた「慈善音楽会」でも、会場に入る時、「突き当りを右へ折れるのが上等で、左りへ曲がるのが並等である。下等はないさうだ。中野君は無論上等である。」と、中野の後ろについていく。その時、高柳は中野の「さも物馴れた」ように席の案内振りを見、「今日に限つて、特別に下等席を設けて貰つて、そこへ自分丈這入つて聴いて見たい」とあるように、

自分の劣等感を意識させられる。ここでは、高柳が批判している「実用以上に余裕のある人」たちがこの場に登場して、そのため、彼は「異種類の動物」のような人たちに「包圍」され、「一人坊つち」のような気持ちになる。また、中野の結婚式の場面である「第九章」において、中野の結婚式に参加する人たちの会話を引用してみよう。最初に、「胡麻塩」は「や、どうも見事な御庭ですね。かう広くはあるまいと思つてたが——いえ始めて。」と中野家の庭を褒める。そして、「しるくはつとを被つた」二人の若い男は「燕尾服」を着ている人の服装を「全く田舎者」、「丸で給仕人」と批判し、彼等の「同類」ではない人を軽蔑する。さらに、高柳が「一間許り左へ進む」ところ、「天幕の柱に倚りかゝつて」煙草をふかしている「洋服と和服」のエジプシアンという紙巻についての会話を聞く。「是なら日に二十本宛にしても二十円位であがるからね」とあるように、「二十円」という金額は大したものではないということを平気で言う。また、「左へ四尺程進んだ」ところ、高柳は株に関する話をしている。「二三人」の金持ち達の会話及び、「黒いフロック」を着ている二人の実業家の「鴨猟」という贅沢な趣味の話を書く。

上述したように、これらの人物の会話は皆金銭に関わっている。そして、中野が高柳を誘う場所には、商人、社会的階級が高い人たち、あるいは、実業界に関わる人たちが必ず出現してくることも確認できる。換言すれば、中野の関わって

いる世界は、文学士である高柳とは対照的な実業家の世界であることが明らかである。よつて、実業家を批判する高柳は、中野の世界に入る度、不愉快になり、疎外されて孤独を感じてしまう。一方で、高柳がこの気持ちから解放されるのは道也と会う時である。金銭の余裕がある人たちに囲まれると、「我を擯斥して居る様に」感じる高柳は、「見すばらしい家に住んで、きたならしい着物をきて居る」道也の姿を見ると、自分の「二十円五十銭の月給」に満足し、「何だか急に広い世界へ引き出された様な感じがする」というように解放感に浸るようになってくる。これは道也が自分と同様な「文学士」であるという親密感及び、道也の思想に対する尊敬もあるが、道也と一緒にいる時の解放感、道也が自分と殆ど同じぐらいの境遇にいるからくるとも考えられる。ここから、中野の世界と高柳と道也の世界は異なるといえるだろう。

次に、中野について、従来あまり重視されていない作品の「第十二章」<sup>22</sup>を見て行きたい。高柳が道也の演説を聞いて帰つて以来、嗜血した。そして、中野が高柳の所に見舞いに行く場面がある。友人の姿を見ると、中野は高柳が転地し「養生」をするために、高柳の「一大の傑作」と交換するという条件で、転地費用の「百円」を申し入れる。この場面における中野の高柳への援助には次のような意味があるのではないだろうか。中野の存在は単に悲観的な高柳の存在と対置

され、甘美な世界に存在する人物であるばかりではなく、実業家の役割も果たしているのである。即ち、高柳はかつて中野に「保護者」でもあつて、気楽に勉強が出来ると名作も出して見せるがな」と漏らしたことがある。この「百円」によつて、中野は文学士である高柳の「保護者」になるだろう。また、中野の高柳への誘いとともに考えると、中野は実業家の代表であるが、高柳がよく批判する他の実業家とは相違していると考えられる。さらに、作品の最初から最後まで高柳と中野の存在が対照的に配置されているのは、高柳の文学士のイメージと中野の実業家のイメージとを強調するためであると言えよう。同じ「第十二章」では、実業家の代表である中野の援助は、道也まで及んでいることを読み取れる。中野から「百円」をもらい、道也のところに行くと、高柳は借金を取り立てられている道也に遭遇してしまう。道也を救済するために、高柳は道也に「百円」を渡し、「人格論」を譲ってもらう。言い換えれば、道也は結局実業家を代表する中野の「百円」によつて困難な状況から救われるといえる。

以上のように、中野は高柳と性格が対照的に設定されていると見られるが、実際に文学士である高柳を援助する実業家の役割も担っていることが読み取れる。

### 三、拘泥している高柳と

#### 拘泥していない中野の対比

中野と対置される高柳は、悩みを抱えている青年として描かれており、その特徴の一つが、彼の「拘泥」しやすい性格である。内田道雄氏<sup>(23)</sup>は高柳が「心の秘密」にひとり拘泥していることを指摘するが、論者は彼が「心の秘密」のみならず、他人の「視線」にも拘泥していることを付け加えたい。彼はかつて『江湖雜誌』に掲載された道也の筆名である「憂世子」による「解脱と拘泥」という論文を読む。論文の一部分は次のように書いてある。

・「自己が拘泥するのは他人が自己に注意を集注すると思ふからで、詰りは他人が拘泥するからである。……」

これを読み、高柳は「音楽会の事」を思い出し、自分が拘泥していることを認識させられる。音楽会の際、会場に入り、席に着いた中野は高柳の服装に気がつき、『おい、帽子を取らなくっちゃ、いけないよ』と友達に注意する。高柳は「卒然」として帽子を取ってしまったが、「左右を一寸見た。三四人の眼が自分の頭の上に注がれて居たのを」発見した際、「矢つ張り包圍攻撃だと思つた。成程帽子を被つて居たものは此広い演奏場に自分一人である。」と他の聴衆から隔離されたように感じる。中野に注意される高柳は、さらに自分の外套に拘り、『外套は着て居てもいゝのか』と中野に確認する。『外套は構はないんだ。然しあつ過ぎるから脱がうか』と答えた中野が外套を脱ぐ姿を高柳は見守る。自分ほど他人の視線に拘らない中野の外套を脱ぐ姿に対して、高柳

は「羨ましく眺めて」いる。そして、外套を脱いだものの、中野は座る様子もなく、「片手を椅子の背に凭たせて、立ちながら後ろから、左右へかけて」眺めている。その時、「多くの人の視線は彼の上に落ちた。中野君は平気である。高柳君は此平気を又羨ましく感じた。」とあるように、高柳とは対照的に、中野の拘泥していいない姿が浮上し、このような構図が意図的に設定されているといえる。

他人の拘泥しない姿を見て、「羨まし」く感じる高柳の気持ちは他の箇所にも見られる。彼は『江湖雜誌』を読み終わり、目を挙げ、一人の「小女郎」を目撃する。「小女郎は水仙の花に一寸手を触れて、花活のそばにある新聞をとり上げた。(略) 退屈のあまり、ぼうんを聞いて器械的に立ち上がったのである。羨ましい女だと高柳君はすぐ思ふ。周りの視線に拘泥しない「小女郎」の姿を見て、高柳は感心する。しかし、高柳はなかなか他人の視線を無視し、行動を取ることはできない。結局「一人坊っちゃん」になり、苦しんでしまう。「あれで一人ぢや矢張り不愉快なんだ。不愉快なら出てくればいゝのに猶々引き込んで仕舞ふ。気の毒な男だ」とあるように、中野は高柳の性格を理解している。しかし、中野がどれだけ高柳を助けようとも、高柳は中野に全てを打ち明けようとしていない。また、「いゝえ、僕あああまりそんな事を聞くのが嫌だから、それに、あの男は一向何にも打ち明けない男でね。あれがもつと淡泊に思つた事を云ふ風だと慰め様

もあるんだけれども」という中野の言葉には、高柳の考えすぎる性格が表れている。このような自分の悩みに閉ざされている青年と気楽な青年という性格の対照的な構図は、同じ漱石の『虞美人草』と『行人』においても見られる。まず、『野分』に近い時期に発表された『虞美人草』から見て行きたい。

『虞美人草』<sup>24</sup>において、上述した中野と高柳の關係に似通っているのは宗近と甲野の關係であり、作品の最初の箇所から、宗近と甲野の対照的な性格が描写されている。甲野は「余計な事を考えへてる」人物として設定されている。一方、宗近の方は、自分の父を訪問する際に、藤尾の母が発した「いゝえ。誠に陽気で淡泊してゝ、結構で御座いますねえ。

どうか一さんの半分でいゝから、欽吾がもう少し面白くして呉れゝば好いと藤尾にも不断申して居るんで御座います」が「という言葉から分かるように、物事に拘らない性格である。ここで注意したいのは、『虞美人草』にも『野分』のように「淡泊」という言葉が使われていることである。また、友人の性格を見抜く宗近は、甲野を助けようとする。甲野が家出をする理由を聞いた宗近は、「なぜ黙つて居たんだ。向を出して仕舞へば好いのに……」と甲野に聞く。この宗近の言葉は、「不愉快なら出てくればいゝのに猶々引き込んで仕舞ふ。気の毒な男だ」という『野分』の中野の言葉を喚起させる。以上のように、両作品に共通して、気楽な青年



と内向的で自分の苦しみに閉ざされている青年の姿が描かれている。このような構図は漱石の後期の作品である『行人』にも見られる。

ここで、『行人』<sup>25</sup>の一郎とHの関係に着目したい。一郎とHは青年ではないが、性格の側面からいえば、『野分』の中野と高柳、及び『虞美人草』の宗近と甲野に共通しているところがある。Hは「鷹揚」で、「兄とは殆んど正反対な此様子なり気風なり」と描写される。また、一郎が評するように、自分のことは「研究的」である反面、Hは「実行的に生れた」人である。ここで、『虞美人草』と同様に、考える男性と実行する男性の姿が浮上する。そして、二郎がHに自分の兄の最近の様子を尋ねる場面で、「最も淡泊な態度で話して呉れた」とあるように、実行する男性に対して再び「淡泊」という言葉が使われる。Hは『要するに僕は人間全体の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさを経験してゐる』という一郎の悩みを聞いて、『もつと氣を楽にしなくつちや』と勧め、「心のうちで、何うかして兄さんを此苦痛から救ひ出して上げたい」と、友達を助きたい気持ちで湧いてくる。Hは『自分を生活の心棒と思はないで、綺麗に投げ出したら、もつと楽になれるよ』と言うが、「煩悶家」の一郎は「何にも拘泥してゐない自然の顔を見ると感謝したくなる程嬉しい」と言いながらも、Hのように楽になれず、悩み続けるの

である。

以上のことから、次のようにまとめられる。『行人』は発表時期が『野分』『虞美人草』とは離れているが、二人の男性の関係を軸に見れば、気楽で実行的な男性と内向的で考え込む男性という対照的な人物造型が共通している。また、登場人物の性格を描写するのに使われる表現が酷似していることも明らかにした。ただ、『野分』において、『虞美人草』『行人』と異なる点は登場人物の経済的な面である。『虞美人草』における宗近と甲野は、両方とも裕福な家庭の青年である。『行人』においても、一郎は大学教授で、Hもその同僚であることから、二人は金銭で困らない人たちである。一方、惨めな境遇に置かれた高柳が描写される『野分』では、青年の拘泥だけでなく、金銭の問題も重要な主題とされており、他作品に見られない特徴をもっているといえよう。

#### 四、「窓の外」を見る行為と三人の男性登場人物

##### (一) 中野と高柳の場合

ここまで見てきたように、本作品では、中野と高柳は性格が対照的に設定されていることに加えて、中野は貧乏な文学士である高柳を支援する実業家の役割も果たしていることがわかる。これを見ると、道也是中野と高柳とどのような関係を持つだろうという問題が浮かぶ。三人の登場人物の行動を考察すると、「窓の外」を眺めることが共通していることは

見逃せない。まず、中野から確認していこう。

中野には、「硝子窓を通して」眺めるといふ比喩的な表現が使われている。金銭的に恵まれ、「未来の細君」も持ち、「困らないし、時間は充分あるし、勉強はしたい丈出来るし、述作は思ふ通りにやれる」ため、道也や高柳と異なり、裕福な生活を送っている。高柳が不平を訴えた時も、中野は「さう急いたつて、いけない。追々新陳代謝してくるんだから、何でも気を永くして尻を据ゑてかゝらなくつちや、駄目だ。』と慰める余裕がある。だが、高柳は自分の不満を「残りなく聞いてくれぬ上に、呑気な慰藉をかぶせられるのは猶更残念」に思う。「富裕な名門に生れて、暖かい家庭に育つた外、浮世の雨風は、炬燵へあつて、椽側の硝子戸越に眺めた許りである」(二) 中野は、裕福な世界に閉じこもっているため、「衣食の爲めに活動」している高柳や道也の世界を実感できないのである。また、中野は実際に「窓の外」を見る場面がある。江湖雑誌に載せるため、道也は「現代青年の煩悶」という題目について中野に意見を求める。道也の依頼は「あまり突然」なので、中野は自分の意見をすぐに纏めることができない。中野は考えながら、「窓の外」を見て「躊躇」している。先程指摘したように、「硝子窓を通して」眺めるといふ比喩的な表現は、中野にとつては自分の豊富で甘味な世界に閉じこもっているという意味となる。そして、実際「窓の外」を見る場面では、自分の世界以外のこと

を考えさせられることであり、その世界は実際の世界を象徴していると考えられる。

また、高柳にも「窓の外」を眺める場面がある。それは、音楽会の際、「三部合奏曲」が始まり、聴衆が「化石したかの如く」静かになり、「右手の窓の外」に、高い椈の木が半分見える。高柳はこの「窓」を通して「椈の枝を離るゝ鶯の舞ふ様」を眺める。聴衆の存在を感じない時、高柳は落ち着く。高柳が「窓の外」の風景を眺めるといふ行為は、「包圍」される感情から脱出したいという彼の心境を象徴している。あるいは、高柳の閉鎖されている状態も強調されると言える。その後、高柳は「拘泥と解脱」を読んでも、自分の「拘泥」している状態からまだ脱出できない。高柳は「只文界に立つて、ある物になりたい」という願望を持つが、「金が無い、時がない」ため、自分の意思を遂行できない状態にある。そして、彼は道也と同様に「実業家」を批判するが、西洋料理屋で二人の実業家を見て、『あゝ云ふ風に余裕がある様な身分が羨ましい。』と評するように、貧困に苦しむ一方、「余裕がある」実業家のようにになりたいという望みも窺える。しかし、自分は辛い境遇を乗り越えず、「自分を一人坊つちの病気にしたものを」を「世間」のせいにしてしまう。よつて、高柳は「不愉快の眼鏡を掛けて」「人間の根本義たる人格に批判の標準を置かずして、其上皮たる附属物を以て凡てを律しやうとする」「世の中」を見て、悲観するようになる。

以上のことから、次のようにまとめられる。中野と高柳には同じ「窓の外」を眺める行為が共通しているが、その行為の意味は異なる。中野にとつて、「窓の外」の世界とは實際の世界を意味し、裕福に暮らしている彼はその世界を実感することができない。一方、高柳にとつて、「窓の外」を眺める行為は、脱出したいという彼の心境が現われ、窓の外の世界は自由の世界であると言える。

## (二) 道也の場合

道也は「窓の外」を眺めるのは「現代の青年に告ぐ」という演説をする場面である。これを考察する前に、道也の思想をまず確認しておこう。道也は東京に戻る際、もう「教師」の職業には就かないことを妻に伝える。彼は、「人格に於て流俗より高い」という自負を持ち、自分の「道」を守りつつ、「たゞわが人格の力で、未来の国民をかたちづくる青年に、向上の眼を開かしむるため、取捨分別の好例を自家身上に示せば足る」という使命を遂行しようとする。そのため、「筆の力によらねばならぬ」仕事を選択する。作品において、「解脱と拘泥」という論文及び「現代の青年に告ぐ」という演説は道也の思想を表すものといえる。それらの内容を考察すれば、「富」、「実業家」、あるいは「権利があるもの」に対する道也の批判的な姿勢が込められていることが分かる。拘泥による苦しみと二つの解脱する方法が書かれている「解脱

と拘泥」においても、「位地の高いものは尤も此罪を犯し易い。(略)彼等のあるものは此區別さへ心得て居らん。彼等の趣味を教育すべく此世に出現せる文学者を捕へてすら之を逆しまに吾意の如くせんとする。」とあるように、社会的な地位が高い人たちに対する道也の批判が明確に現れている。さらに、「現代の青年に告ぐ」においても、道也のこのような考えは何か所にも現われている。

・然し金以外の領分に於て彼等は幅を利かし得る人間ではない、金以外の標準を以て社会上の地位を得る人の仲間入は出来ない。」

・「換言すれば金があるから人間が高尚だとは云へない。金を目安にして人物の価値をきめる訳には行かない」

・「それを金があるからと云ふて無暗にえらがるのは間違つてゐる」

「実業家」を批判しながら、道也は「学者であればこそ金がないのである。金を取るから学者にはなれないのである。学者は金がない代りに物の理がわかるので、町人は理窟がわからないから、其代りに金を儲ける」と貧乏な学者の意義を定めようとしている。しかし、道也の仕事は「人から見ると酔興な苦勞」に過ぎず、「一文にもならない事許りなざるんですもの、誰だつて酔興と思ひますわ」と妻にまで批判されてしまう。さらに、作品の最初に説明される道也の経歴について考えると、以下のように纏められる。「越後」にいた

際、「黄白万能主義を信奉するの弊とを」戒めたため、その場を去らなくてはならなくなる。続いて、「九州」では、実業家との問題のため、再び自分の職業を辞めざるを得なくなる。そして、「中国辺の田舎」に行つた際、社会的地位の高い人達と衝突したため、その場を去り、東京に戻つてきた。このように、「実業家」及び、社会的に地位が高い、あるいは権利のある人を批判する道也の姿勢は一貫している。そして、作品の最後と考え合わせれば、道也の在り方は結局東京に戻る前と変わらず、自分の執着している信念から逃れられない状態になつているのである。道也は自分の思想に執着し、それを実現できずに、自分の思想の中に閉ざされている状態が以下の引用によつて象徴されている。「現代の青年に告ぐ」という演説の最中で、「道也先生は、がたつく硝子窓を通じて、往來の方を見た。折から一陣の風が、会釈なく往來の砂を捲き上げて、屋の棟に突き当つて、虚空を高く逃れて行つた」(十一)という描写がある。ここでは「風」について注目したい。「初冬の日はもう暗くなりかけた。道也先生は風のなかを帰つてくる」とあるように、道也が登場する場面では、「風」が使われている。さらに、「風」が何度も描写される。「第十一章」においては、道也が家を出る際に妻に引き留められるが、「外は未だに強く吹いてゐる。道也先生の姿は風の中に」消えるとある。そして、道也が「壇上」に現れる際は、「ひよるながい道也先生は綿服の儘にあらはれた。

かれは此風の中を金釘の如く直立して来たのである。から風

に吹き曝されたる彼は、から／＼の古瓢箪の如くに見える」と描かれている。また、演説の最中で、道也が「理想は諸君の内部から湧き出なければならぬ。諸君の学問見識が諸君の血となり肉となり遂に諸君の魂となつた時に諸君の理想は出来上るのである。」という自分の思想を強調する際にも、「風の音がごう」と鳴る。このように何度も描写される「風」は道也ことを象徴していると考えられる。彼の演説はその場にいる青年の関心を引き寄せるが、「屋の棟に突き当つて、虚空を高く逃れて行つた」という箇所は、風が吹き去つた後に何も残らないように、結局彼自身も何も救うことができない。このことから、「硝子窓」の外というのは、道也の思想が通用しない、金銭が重視される実際の世界を指すことが読み取れる。

以上のように、中野、高柳、道也には、「窓の外」を眺めるといふ行為が共通しているが、意味は異なる。中野は自分の「豊富」な世界に閉じこもり、道也は自分の思想の中に閉ざされていることから、自分の見たい世界だけに集中し、自分の理想に閉ざされている状態を表すために、「窓の外」を眺める行為が使われているのである。彼らにとつて「窓の外」の世界は実際の世界を指している。一方、高柳にとつて「窓の外」の世界は自由の世界を意味している。行為の意味は相違しているが、登場人物が皆閉ざされている状態にある

点は共通しているといえる。

## 五、現実をそのまま見る女性

自分の世界、あるいは思想の中に閉ざされている男性たちの登場人物について検討してきた。その上、道也の妻である「御政」が、どのように男性の登場人物と関わるのかについて考えてみたい。ここまで男性たちの登場人物はいかに金銭問題と関わるかについて考えてきた。金銭問題が本作品の重要な主題であるため、本節も金銭問題を中心に、考察を行いたい。従来、道也の妻、御政については、夫婦関係という関係から論じられてきた。高田瑞穂氏<sup>26)</sup>は道也夫婦について、「夫婦間の溝渠の所在を示すに止まった。(略)やがて『道草』における「家」の凝視を可能にした端緒があつたのである。」と指摘する。高田氏の論文を踏まえた越智治雄氏<sup>27)</sup>は道也と妻の会話に着目し、「文学者道也の論理を相対化できる妻の論理が対置されていたことは否定できない。」と道也の妻の役割を述べる。一方、近年、藤堂尚夫氏<sup>28)</sup>は道也の妻について「彼女は(附属物)によつて<sup>29)</sup>、(人格)を蹂躪する類の人間である。道也は、家庭でもまた「世間」と戦うことを余議なくされているのである。」と妻の態度が世間の態度と一致することを指摘している。確かに、道也夫婦の間に溝があることは否めないが、ここで注意したいのは、金銭問題への妻の対処方法である。教

師という職業を拒否する道也の生計は困窮している。御政は家庭の生活のことを心配し、何度も道也に不平を洩らし、批判もする。彼女の関心は、道也のやっていることで「御金がとれる」のかどうかである。また、「妻君の世界には夫としての道也の外には学者としての道也もない」とあるように、道也と異なり御政の方は世界を實際のままに見、生活の面を重んじていることがわかる。以下の道也夫婦の会話から、家計を真剣に考える妻の姿が浮上する。

・「あなた、何時迄かうして入らつしやるの」と細君は術なげに聞いた。

『何時迄とも考はない。食へれば何時迄かうしてゐたつていゝぢやないか』

『二言目には食へればくゝと仰しやるが、今こそ、どうかかうにかして行きますけれども、此分で押して行けば今に食べられなくなりますよ』

『そんなに心配するのかい』  
細君はむつとした様子である。』

・「今でも、そんな御金が入る見込があるんですか」と不思議さうに尋ねた。

『今は昔より下落したと云ふのかい。ハ、ハ、ハ、』と道也先生は大きな声を出して笑つた。妻君は毒気を抜かれて口をあける。』

御政が真剣に家計の問題を考えている一方、道也は無関心

な態度を示す。「かく事に於ては毎日毎夜筆を休ませた事はない位である」とあるように、自分が必死に「書く」にも関わらず、妻が期待する程の金をもらえない道也は、「たまさか二円、三円の報酬が彼の懐に落つる時、彼は却つて不思議に」思う。そして、『いゝさ、さう心配するな。もう一カ月もすれば百や貳百の金は手に這入る見込があるから』と道也先生は何の苦もなく云つて退けた。」とその場毎に妻を安心させるように、誤魔化している。一方、御政が道也の兄の所に行くことや、『(略) 今月の末になると米薪の払で又心配しなくつちやなりませんから、算段に出掛けたくです』ということなどから、金銭の工面に苦勞し、生計を成り立たせようと努力しているとわかる。よつて、御政が住んでいる「単純な世界」とは、金銭が大事な實際の世界であると言えよう。

また、金銭問題への御政の対処方法以外に、道也の「主義」に対する道也と御政の違ふ考え方についても検討したい。道也は「物質的に何等の功能もない」自分の筆の仕事を「彼の生命がある」と考える。さらに、道也が『筆で食ふ積なんだよ。御前も其積りにするがいい』と言ひ出した時の御政の言葉、『食べるものが食べられ、ば私だつて其積になりますわ。私も女房ですもの、あなたの御好きで御遣りになる事とや角云ふ様な差し出口はき、あしません』から、道也の仕事が家族の生活を支えられる限り、彼女は彼の主張に

反対しないことが分かる。しかし、「此手腕に対して、別段に感謝の意を表しやうともせぬ」とあるように、道也の仕事が報酬を伴わないため、御政は道也の仕事に有難さを感じるものがなく、夫を「意気地なし」な人と看做してしまう。

御政は『現に教師をしてゐた方が楽で、今の方が余つ程苦しいぢやありませんか。あなたは矢つ張り教師の方が御上手なんですよ。書く方は性に合わないんですよ』と道也に勧めるが、彼は自分の主張を変えない。また、『あなたの楯のとり様で折角の私の苦心も何の役にも立たなくなりませわ』という御政の言葉や、『自分丈はあれで中々えらい積りで居りますから』／『ハ、ハ、ハ、えらい積だつて。いくら一人であらがつたつて、人が相手にしなくつちや仕様がな』といふ御政と道也の兄との会話から見られるように、道也の「主義」は實際の世界に通用しないことは明らかである。換言すれば、道也と対置された御政の存在が描かれることによつて、實際の世界に妥協せず、自分の理念にとらわれる道也の存在が一層強調されていると考えられる。上述したように、自分の理想にとらわれず、實際の世界をそのまま見て、生きようとする御政は、道也のみならず、「世の中を知らない」中野と、「空想は空想の子」である高柳と正に対照的に設定されていると言える。

以上のように、本作品において、金銭の問題は男女間での違いが見られる。道也から見られるように、自分の理念に閉

ざされ、中野のように自分の甘美な世界しか知らないという青年の姿から、実際の生活をあまり重視しない男性の登場人物が明らかになる。さらに、高柳のほうは、西洋料理屋で「商人」を批判しつつも、『あの連中の十分一の金と時があれば、書いて見せるがな』と発言葉から、道也と異なり、金銭を望んでいることが分かる。だが、「卒業前から自活はしてゐた」高柳の『卒業しても矢つ張りこんな困難するだらうとは思はなかつた』という言葉から、彼の理想と現実には矛盾があると考えられる。高柳は理想にとらわれた青年であり、厳しい現実の世界の中で苦しんでいく。その一方で、これらの男性の登場人物とは対照的に、実際の世界を見る「御政」という女性の登場人物が設定されていることがわかる。

## 六、まとめ

『野分』では、金銭世界及び、閉ざされている男性たちについて物語られる。そして、道也と高柳という人物以外に、中野という青年の登場人物も重要であることが明らかだ。中野は高柳を金銭的に補助する役割も担っている。作品の結末に見られるように、中野の「百円」によって道也までも救済されることから、道也、高柳、中野は金銭の面で結びついていると言える。いかに高尚な文学士である道也及び高柳であっても、金銭が大事な世界から逃れないであろう。また、中

野と高柳の存在を再考察することによって、拘泥している青年像と拘泥していない青年像が明らかになった。拘泥している青年は結局「孤独」で世間に入り込めず、悩みを抱きながら自分の世界に閉じ込められてしまう。このような構図は漱石の『虞美人草』と『行人』にも見られる。ただし、『虞美人草』と『行人』の場合は、煩悶を抱く男性たちの登場人物は皆金銭的に恵まれているのに対し、『野分』で煩悶を抱く登場人物が貧乏な人物として設定されている点は、二作の登場人物の設定とは対照的で、本作品の特徴である。また、「窓の外」を眺める行為を考えた結果、中野、高柳、道也は自分の世界に閉ざされている状態であることを明らかにした。一方、自分の思想にとらわれず、世界をそのまま見る女性の登場人物である御政は、男性の登場人物と対照的に設定されていることも読み取ることができた。

## 注

- (1) 秋山公男 『野分』の成立（『立命館文学』、一九八六・七）
- (2) 剣持武彦 「夏目漱石『野分』論——白井道也と内村鑑三——」（『清泉女子大学紀要』、一九九四・十二）
- (3) 明治三十九年十月十六日の書簡
- (4) 書簡の内容は以下の通りである。「近々「現代青年に告ぐ」

と云ふ文章をかくか又は其主意を小説にしたいと思ひます。

(略) あの手紙のうちで困るのは現代の青年はカラ駄目だと云ふ事と「普通の小説家なら！」と云ふ自賛的の語である。自分が小説をかいて、人の小説を自分のに比べて攻撃するのはいやな心持ちだ。夫から現代の青年に告ぐと云ふ文章中には大いに青年を奮発させる事をかくのだから「カラ駄目」ぢやちと矛盾してしまひます。」

(5) 石崎等「漱石と「新しい世代」覚書——『野分』前後——」  
〔「文芸と批評」、一九六七・六〕

(6) 内田道雄「補注」、『日本近代文学大系 第二十五卷 夏目漱石集Ⅱ』(角川書店、一九六九・十)

(7) 桶谷秀昭「勸善懲惡と性格描写——『野分』、『虞美人草』、『増補版 夏目漱石論』(河出書房新社、一九八三・六)

(8) 例えば、作品の十一章においては、金力に対する批判について次のように述べられている。『一般の世人は労力と金の關係に就て大なる誤謬を有してゐる。彼等は相応の学問をすれば相応の金がとれる見込のあるものだと思ふ。そんな条理は成立する訳がない。学問は金に遠ざかる器械である。金がほしければ金を目的にする実業家とか商人になるがよい。学者と町人とは丸で別途の人間であつて、学者が金を予期して学問をするのは、町人が学問を目的にして丁稚に住み込む様なものである。』一方、漱石の断片は以下のように書かれている。「一般ノ世人ハ勞力ト金ノ關係ニ於テ大ナル誤謬ヲシテ居ル。彼等ハ相

応ノ学問ヲスレバ相応ノ金ヲ取レル見込ノアル者ダト考ヘテ居ル。ソノナコトハドウ考ヘタツテ成立スル訳ガナイ。学問ハ金ニ遠ザカル器械デアル。金ガ欲シケレバ金ヲ目的ニスル実業家トカ、商人ニナルガイ。学者ト町人トハ丸デ別途ノ人間デアツテ、学者ガ金ヲ予期シテ学問ヲスルノハ町人ガ学問ヲ目的ニシテ丁稚ニ住ミ込ム様ナ者デアル。」

(9) 池内輝雄「『野分』考——意図と表現の間——」(『漱石作品論集成【第三卷】虞美人草・野分・坑夫』、桜楓社、一九九一・七)

(10) 注(1)に同じ。

(11) 佐藤泰正氏「『野分』——再びその(文学)とは何か——」(『漱石作品論集成【第三卷】虞美人草・野分・坑夫』、桜楓社、一九九一・七)及び酒井英行氏「『野分』論」(『漱石作品論集成【第三卷】虞美人草・野分・坑夫』、桜楓社、一九九一・七)は似通つた見解を示す。

(12) 小泉浩一郎「観念と現実」——『野分』論——(『講座 夏目漱石 第二卷(漱石の作品)(上)』、有斐閣、一九八一・八)

(13) 高橋秀晴「『野分』再考——その二面性をめぐって——」(『国語研究』、一九九三・二)

(14) 玉井敬之「『野分』成立の側面」(『日本文学』、一九六五・十二)

(15) 酒井英行氏「『野分』論」(『漱石作品論集成【第三卷】虞美人草・野分・坑夫』、桜楓社、一九九一・七)も玉井氏と似通つ



ている見解を示す。酒井氏は「高柳のモデル論議には諸説があるが、草平を念頭に置いて、その個人的事情を交換し、より普遍的な青年像に仕立てたのが高柳であつたと、私は考えたい。」と述べ、高柳という人物から漱石像を見出そうとする。

(16) 西垣勤『野分』私論(『漱石作品論集成【第三卷】虞美人草・野分・坑夫』桜楓社、一九九一・七)

(17) 注(6)に同じ。

(18) 佐藤泰正『野分』——再びその(文学)とは何か——(『漱石作品論集成【第三卷】虞美人草・野分・坑夫』桜楓社、一九九一・七)

(19) 例えば、『第八章』において他の章と比較的に「金銭」にかかわる描写が多くないと見られるが、以下の引用からわかるように、「立派な紳士」というお金持ちの人物も登場してくる。

「黒紋付の羽織に山高帽を被つた立派な紳士が綱曳で飛んで行く。車へ乗るものは勢がいゝ。あるくものは突き飛ばされても仕方がない。『えつ、あぶねえ』と拳突を喰はされても黙つて居らねばならん。高柳君は幽霊の様にゐる」

(20) 注(15)に同じ。

(21) 漱石の明治三十九年の「断片」において『野分』の構造中のメモは次のように書かれてある。

① 学問ノアル高尚ナル学者

② 悲酸ナル家庭ニ生レテ漸ク卒業シタル人

③ 狡猾(ママ)ニシテ仮面ヲ被ル男

④ 華族ノ馬鹿ト驕悍ナル夫人

⑤ 只美的ナ事許リヲ好ム人

⑥ 浅ハカニシテ、意志モ、感情モ、足ラヌ妻君

内田道雄氏(注6に同じ)は上述したメモを『野分』における人物構図を示すものであると考え、「(1)」と「(6)」が道也夫妻に照応しているのに対して、高柳は「(2)」の性格を布与されていると見ることができよう。」と述べ、中野については「メモの人物構図の中で、「(5)」の「只美的事許リヲ好ム人」の役割を振られていると判断できる。」と指摘する。

(22) 例えば、小泉浩一郎氏(注(12)に同じ)は作品の結末である「第十二章」について以下のよう述べる。『野分』の結末に一つの弱さ——中野の出資した百円による道也の窮境の救済という姑息な設定の弱さを与えずにはいかなかったのではあるまいか。」

(23) 注(6)に同じ。

(24) 『虞美人草』は明治四十年六月〜十月まで『朝日新聞』に連載された。明治四十一年一月に春陽堂より刊行された。

(25) 『行人』は大正元年十二月〜大正二年十一月まで『朝日新聞』に連載された。大正三年一月に大倉書店より刊行された。

(26) 高田瑞穂『道草』の人生(『成城国文学論集』、一九六八・十一)

(27) 越智治雄『野分』(『漱石作品論集成【第三卷】虞美人草・野分・坑夫』桜楓社、一九九一・七)

(28) 藤堂尚夫 『野分』論——道也をめぐって——(「イミタチ  
才」、金沢近代文芸研究会、第十五号、一九九〇・十)

(29) 藤堂尚夫氏は以下の引用の部分に注目している。「今は丸で  
反対だ。世は名門を謳歌する、世は富豪を謳歌する、世は博士、  
学士迄をも謳歌する。然し公正な人格に逢ふて、位地を無にし、  
金銭を無にし、もしくは其学力、才芸を無にして、人格其物を  
尊敬する事を解して居らん。人間の根本義たる人格に批判の標  
準を置かずして、其上皮たる附属物を以て凡てを律しやうとす  
る。此附属物と、公正なる人格と戦ふとき世間は必ず、此附属

物に雷同して他の人格を蹂躪せんと試みる。」(三)氏は「皮」という言葉について、「漱石は「皮」(附属物)ととらえてい  
るのである」と指摘する。

【付記】本文の引用は、『漱石全集 第三巻』(一九九四・二、岩波  
書店)による。

※ なお本稿は国際交流基金より、日本研究フェローシップ事業の  
交付を受けて行った研究成果の一部である。

(ウイリヤエナワット・ピヤヌット／本学大学院博士後期課程)